

入信氏道程

普通の俗人は、専門語が多くて読んでもわからない。僧侶も読まない、俗人は読めない、読まない書物なら、高い費用を出して出版すまいかとも思ってみるけれども、千人に一人でも開眼する人がいたら、と思つて实地に求道した記録を残しておくのである。

入信之道程

はしがき

蟹は甲羅に応じた穴を掘るといいますが、仏法の大海は凡慮の想像するところではありませんから、各自の程度々々で味わって、自分のが本當だ、正流だ、正意だと言つて、殻を握つて喜んでいるのでございますが、本當に人世受生の最大果報者になれましたか。一切の有碍に障りなし、十方法界我物なりという神通自在无碍自在の大満足の境地に立てましたか。金剛の真心を獲得すれば横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲。とありますが、これを開けば

南无阿彌陀仏をとなうれば　この世の利益きわもなし

流転輪廻のつみきえて　定業中天のぞこりぬ。

五濁悪世の衆生の　選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の　功德は行者の身にみたり。

闇に向う者は滅ぶ

鬼外

遠仁者疎途

睡 無宗教

食 不具 醜惡

色 貧賤

財 愚劣 虛弱

名 短命

病 盛衰 增減 生滅 損得

闇

惱

病

無明

物質(本能)

慾

怒

痴愚

地獄

自業苦

不成功

投獄

倒産

不滿

不平

橫領

詐欺

虛偽

酒色

惡友

向下門

心

光明

精神（教導）

施

和

光

仁徳

布施
親切

朗明

諦

功徳

持戒
謹慎

長命

誠実

康

不変

忍辱
忍耐

強健

感謝

福内

精進
努力

富貴

法悦

不苦者有智

禪定
反省
修養

美貌

完全

親切

光に向う者は栄える

積善

和楽

成功

業苦楽
極楽

向上門

善友

経戒

誠実

感謝

法悦

奉仕

親切

積善

和楽

成功

業苦楽

極楽

と、信心獲得の人には功德は満ちみちているはずでございませう。

大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。と仰せられてありますが、本当に大悲の本願の舟に乗りましたか、名号六字と、一体になれましたか。一体になれば生死の苦海が光明の広海となり、順境でよし逆境でよし、この人世が感謝法悦の世界になれるのです。

煩惱があるから、喜ばれないのではありません。攝取されていないから、慶ばれないのです。名号と一体になっていないから、憶念の心常にして仏恩報ずる思いありになれないのです。

御教化を覚えたのは、信仰ではありません。あなたの実機と名号とが一体になったときでなければ、晴れた天地は味わえません。晴れたときでなければ信前信後の水際をはたさないのです。真仮の分際も諦得できないのです。

入信の方法を聖人は三願転入で教えられ、蓮師は「もろくの雑行雑修自力の心を

ふりすて、乃至たのむ一念ねんのとき往生おうじやう一定じやう」と自分の体験たいけんを通してとお教示きやうじしてあります
が、人々ひとびとはそんな面倒めんどうなことはおかまいなく、信仰しんどうはすんだつもりでいるのですか
ら、信心しんじんの贖物にせものであります。これから実地じつちの求道きゅうどうをして本物ほんもの、如実にょじつの信者しんじや、真しんの仏弟ぶつで
子しにさして頂いたくのです。

聖人しようにんは「遇あい難がたくして今遇いまあうことを得えたり、聞きき難がたくして已すでに聞きくことを得えたり」
と仰おほせられてあります、各自かくじもお言葉ことばの真似まねをしています、本ほん当ちやうに遇あい難がたかつた
ですか、聞きき難がたかつたですか。自分じぶんは宿善しゆくぜんが厚あついと自惚うぬぼれています、開か発はつまでは到ち
達たつしていいのであります。この「入信にゅうしんの道程どうてい」を讀よんでごらん下さい。自分じぶんの信仰しんどう
の程度ていどがよくわかります。

自分じぶんは自力じりきを起おこしたことはないと思おもいますが、自力じりきを知らないのだから、他力たうりき不ふ
思議しぎに生いかされることを知しらないのです。自分じぶんは疑うたうたことはないと思おもっています
が、疑うたが知らないのだから晴はれた天地てんちを知しらないのです。永劫えうじやうの問題もんだいですから、必ひつ

死に求道をしましうや。

邪見憍慢の悪衆生とは、誰のことでしようか。邪見とは、信仰にそんなはつきりしたことがあるものかと悪口を言つて、法の不思議さを知らない人です。憍慢とは、自分分は素直に聞いていると自惚れて、機の醜悪さを知らない人です。これは第十九願の行者と第二十願の行者のことで、第十八願の信樂開發まではよう進まない人です。

実際に求道してごらん下さい、難中の難です。この極難を突破さゝれた間即信の一念で、十方法界が開けるのです。三世の業障一時に罪が消えるのです。五劫思惟の本願は、この逆謗の屍の私一人のためでございましたと、天地が転倒するほどの慶び、身を寸断にされたほどの三品の懺悔をさしていたゞくのです。死後の極樂も結構でございますが、生きています今、摂取された慶びは、この人世のままが光明の広海となり、順縁逆縁がみな拌めるのです。天地自然は私一人のために運行し、食べているものすべてが百味の飲食の思いがし、着ている着物は天地の恵みでできているから、応

報ほうの妙服みょうふくのおもいがし、住すんでいる家いえは宮殿楼閣くうてんろうかくのおもいがするのです。死しんだ先さきは
仏ほとけさまがつれて行ゆかるゝのですから、今いまから世話せわをやかなくても、今いまの一息いき々々々々が念ねん
々々称名常懺悔ねんしやうじやうじよんざんげ、称ねん々々念ねん々々常じやう歡喜くわんぎ、万ばん歳さい万ばん歳さい万ばん々々歳さい、無む量りやう永えい劫ごう迷まよわぬ身みにさしていたゞ
いた鴻恩かうおんは、感かん謝しゃの言こと葉はも南な无む阿あ彌み陀だ仏ぶつ、懺ざん悔げの言こと葉はも南な无む阿あ彌み陀だ仏ぶつ、往おう生じやうの一段だんは
仏ぶつ智ちの不ふ思し議ぎ、報ほう謝しゃの一段だんは身しん命めいを賭としてやり抜ぬくのです。

四面楚歌めんそかの声こえすれども屈くつせざるはこれ男子だんし

信しんじて行おこなえば天てん下か一人ひとりといえども強つよし。

倒たをされし竹たけはそのまゝおきあがる

倒たをせし雪ゆきはあとかたもなし。